2021 年度学術交流支援資金　研究活動報告書
プロジェクト番号：1-10
科目名：アジアとアフリカをつなぐイニシアティブ
担当責任者：環境情報学部　長谷部葉子

2021 年度があと 1 か月で終わろうとしている今、この申請書を提出した際は、この時期には COVID19 が収束し、アジア（インド、インドネシア、中国)、アフリカ諸国（コンゴ民主共和国、モロッコ、サウスアフリカ）の国々と双方向の学生の派遣の準備を終えているであろうと想定していた。申請時点では、約 1 年強の COVID19 の多大な影響後の新たなハイブリッド型でのプロジェクト計画、関係性の再構築を見据えて、双方向の渡航により、このオンラインのみに限定された空白期間のリセットを行い、ハイブリッド型と対面型の新コミュニケーション形態によるソーシャルトランスフィーメーションの実現を視野に入れていた。具体的には、日本と持続可能なパートナーシップを若手起業家育成、特に教育、農業、衣食住に焦点を当てた展開を見据えていた。新たな関係国の参画を増やし、双方向性での研修制度、シンポジウム、実践的企業インターンプログラムへの展開の新たな青写真づくりを視野に入れていた。

報告書作成締め切りを控えた現状は、COVID19 が未だ収束せず、感染拡大の新たな波を迎え、全く渡航という概念は消え去り、その代わりすべての企画・プログラムを完全オンラインに切り替えることで、何とか関係性を滞らせることなく、つなぎ合わせ、オンラインならではの双方向的な工夫・協働・協奏関係は確固としたものになりつつある。ただしこの進捗を確実に実現したのは、一番関係性が長く、一番関係性継続の難易度が高いとされたコンゴ民主共和国との取り組みに限定されていると報告しなければならない。つまりいかなる困難が伴っても、壁にぶつかる都度、あきらめずに、柔軟に実現可能な形を取り続けてきたコンゴ民主共和国との取り組みが、COVID19 以前の双方向性の生の対人コミュニケーションを通して共に培ってきたリスクマネージメント、言語コミュニケーション能力、生活を共にし、喜怒哀楽の全てを共有してきたことで培ってきた信頼関係、相互理解という基盤があったからこそ、一番困難に直面する機会に恵まれてきたコンゴ民主共和国との取り組みが一番、スムースに最初から見据えてきたゴールを見失わずに着々と進んできているということは何よりも報告に値することだと考えている。

2008 年からのコンゴ民との取り組みは、14 年目を迎える現在、ゆるぎない基盤を築き、プロジェクト関係者が卒業後、コンゴ民からは政府関係者、JICA、国費留学生、現地大学教員、文化センターマネージャー、起業家、日本側はアフリカ地域研究者、四大商社アフリカ諸国担当、教育関係者、JICA、JETRO、国家公務員（総務省、経済産業省、外務省など)、起業家などを中心に多岐にわたる進路を選択し、アフリカ諸国との持続的な関係性を構築して

いる。現地日本大使館、JICA 事務局との多岐にわたるご支援により、ODA にもアカデックスプロジェクトが採択していただき、ソーラーシートの学校導入による、地域コミュニティの電化と地域活性の引き金となる地域ビジネスを生み出すソーシャルトランスフォーメーション実現のプロジェクトも様々な困難に直面しつつも粛々と進行している。

この 2 年間、COVID 感染者も両国で、また身近な関係者で発生し、またコロナ以外の基礎疾患で命を落とした両国の関係者が少なからずいる。それぞれがオンラインのみにすべての可能性を限定された中で、より実感を保ち、人間関係重視のプロジェクトが、コロナ禍に於いても関係者がモティベーションを損なうことなく、ソーシャルトランスフォーメーション実現のために発展し続けるプロセスを皆が真剣に努力し、工夫を重ねてきた。その軌跡は、研究者である教員及びプロジェクト関係者の力も大きいが、何よりもこれからの可能性に期待し、制約のある中で自分の見据える研究の方向性を見失わずに探求し、持続可能性を自らのチームワークで保証し続けた両国の学生に皆に焦点を当て、学生が作成した報告書を共有させていただく。コロナ禍以前の若手研究者である学生はみな、現地に赴き、自らの目で確認し、実感をもった手ごたえをもとに研究し、成果を出してきた。現在は、オンライン上にフィールドワークの現場を据えなおし、より想像力たくましく、手探りでネット上の空論にとどまらぬよう、もがき工夫してきた並々ならぬ学生たちの努力に報いるため、2022 年度は、より「生」の実感のある研究環境を作り上げることを約束して学生の作成した報告書につなげる。

研究とは、最初に見据えたゴールを見誤ることなく、柔軟に手段を調整しながら、貫くことであるというのを、特に本科目の関係者を「農」の価値を再発見することで持続可能な新たな発展の切り口に到達したのが何よりもの研究成果である。

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
環境情報学部　准教授
大学院政策・メディア研究科委員
長谷部葉子

2021年度 Congo Project 報告書

メンバー:

＜総合政策学部3年＞三橋舞衣
＜環境情報学部2年＞
小川雅人
＜総合政策学部1年＞
佐藤美乃

目次:

1. 概要
2. フィールド紹介
3. プロジェクトの歴史
    a. 関係図
    b. 学校づくり
        i. 裁縫ワークショップ
        ii. チョークワークショップ・チョーク営業
    c. 社会づくりへ
        i. 日本語授業
        ii. キャンプシリーズ
        iii. スピーチコンテスト
        iv. レクチャーシリーズ
        v. 日本研修
        vi. Open Business Forum
        vii. 個人活動の展開
        viii. withコロナ
4. 現在の活動
5. 今後の展望
    a. プロジェクトのひとまとまりを見据えたマイルストーン
6. PJメンバー個々人の想い

目次

1. 概要: コンゴ民主共和国プロジェクトについて

長谷部葉子研究会コンゴ民主共和国プロジェクト(以下コンゴプロジェクト)は、アフリカ大陸中部に位置するコンゴ民主共和国(以下コンゴ民)の首都キンシャサを主な拠点として活動している。コンゴプロジェクトは、コンゴ民出身の慶應義塾大学英語教員サイモン・ベデロ氏の「教育を通じて祖国に恩返しがしたい」という想いのもと2007年に発足した。「飢えている者に魚を与えるのではなく、一緒に魚の釣り方を考えよう」という理念のもと「協働」を行動規範の軸として活動してきた。「何で魚が釣れるかは現地の人が一番知っている」ことを踏まえ、「日本とコンゴ民の相互的な知見の共有によるより良い社会の想像」をビジョンとして掲げ、活動を行なっている。

2007年にプロジェクトが発足して以降、SFCの建築研究会と共に、キンシャサ市郊外のキンボンド地区にACADEX小学校を建設・運営するところから始まった。2008年から毎年一棟ずつ建 設した校舎は、運営も建築手法も現地の人・現地の材料で創りあげていった点が特徴だ。2016年に、地域で初めての保健室を建設するところで完成を迎え、現在では現地のスタッフによって必要に応じて改修が行われている。また、2008年の開校当初は3人だった生徒も、2013年には 200人を超え、現在は地域のモデル校として幼稚園から高校までの教育を行なっている。これまで、Brother社の協賛によっていただいた電気ミシンを用いた裁縫ワークショップや、日本の同世代と行う異文化理解ワークショップ、馬印社に協力していただくことで、学校で使用するチョークを製作するワークショップを実現してきた。ここから生まれたチョークづくりは、プロジェクト発足当初よりサポートしてくださっていたベニ・エトム氏により「CraiseEx」として法人化され、国内の教育機関へ販売されている。さらに、そこから生まれた利益はACADEXの学生への奨学金として還元されている。

また、2010年からは活動の拠点をACADEX小学校以外にも展開して行き、現地の国立教員大学をはじめ、起業家や国立・私立の大学（院）、日本大使館や独立行政法人国際協力機構JICAをはじめとする多くの関係者との協働が実現されている。2010年から、国立教員大学(以下ISP)にて日本語授業を開始し、2013年には外務省の草の根無償資金により、ISPの敷地内に日本文化センター(以下CCJ:Complex Congo Japon)が建設された。そして、2016年のACADEX校舎完成および自立運営が行われていることに伴い、「学校づくり」から「社会づくり」へとプロジェクトのフェーズを移行し、活動拠点も日本文化センターCCJへと移転した。

日本語授業・日本文化発信の場としてスタートした日本文化センターでの活動も、2016年からは、在コンゴ民大使館職員ならびにJICA職員をはじめとした講師を招いての「Lecture Series」や
「Camp Series」を開催を皮切りに、熱意ある若者や起業家が集まるプラットフォームとしての機能を確立していった。主体性に基づく社会づくりを目標に「アントレプレナーシップ」の醸成に力を注ぎ、現在ではビジネスコンテストの開催や、コンゴ民から日本へ渡航して行う「日本研修」も
行っている。この様に、様々な分野で日本とコンゴ民との相互的な知見の共有による協働を通じた社会づくりに励んでいる。

2. フィールド・紹介

コンゴ民主共和国
面積:234.5万平方キロメートル(アフリカ大陸第2位)
人口:8.679万人(2019年,世界銀行)首都:キンシャサ
民族:200部族以上
言語:フランス語(公用語)、リンガラ語、スワヒリ語、チルバ語、キコンゴ語等
宗教:キリスト教(80%)、イスラム教(10%)、その他伝統宗教(10%)

コンゴ民は、豊富な資源を持つ反面それらを巡った争いが続き、世界最貧国と言われることも少なくありません。キンシャサ中心部では比較的インフラも整備されている一方で、郊外に出ると道路も整備されておらず、私たちも現地の方々と共に電気と水が限られた中で活動に取り組んでいます。現地では公用語としてフランス語のほか、リンガラ語を含む 4つの言語が地域によって使い分けられています。私たちはコンゴ民の方々と日本語、英語、フランス語、リンガラ語を使い分けてコミュニケーションをとっています。

Acadex
「持続可能な学校」を理念に、建設から運営まで現地の人・現地の材料でつくられている。2015年には中学校も開校され、同年からは郁文館グローバル高校の生徒も渡航を開始し、高校生が考えた様々な異文化交流が行われてきた。現在は、現地のモデル校であるだけでなく、2016年に完成した保健室は地元の診療所としての役割を持ち、地域に根付いた学校へと進化を遂げている。

ISP Gombe / Complex Congo Japon
2008年3月に初めて国立教員大学ゴンベ校「ISP Gombe」を訪問し、2010年から日本語授業を開始。2012年、日本語や日本文化を発信するための場所としての日本文化センター「Complex Congo Japon」を草の根無償資金により開設し、日本語を学んだ現地の講師が運営している。 2016年には、ISPとSFCが交流協定を結び、日本文化センターでは日本語・日本文化の授業のみならず、起業家育成講座「Lecture Series」なども運営し始めた。2017年には、日本語スピーチコンテストならびにビジネスコンテストが開催された。現在では、起業家や志の高い人々が集まるプラットフォームとして認知されれつつあり、日本人が先導せずとも、マネージャーのムスサ氏を筆頭に、現地の方々が自発的な取り組みを多方面で展開している。

JapanClub
日本に関心のある起業家や起業に興味のある若者など、約60人近くが在籍するビジネスプラットフォームとして、2018年7月に設立。様々な社会課題に対して、問題意識を持った人々が集う中で、起業家を育てる環境が少ないことや、今まで日本人とコンゴ人が定期的にビジネスについてディスカッションする場がないことから立ち上がった。

3. プロジェクトの歴史:

a. 歴史まとめ

2008年 <プロジェクト始動>

[4月] 第1回渡航。キンシャサ市、キンボンド地区を拠点にフィールドワークを開 始。インフラ・経済・衛生・言語などに関する調査の実施。地域・教育関係機関へ向けAcadex小学校開校の説明会開催。

2009年

[8月] 第2回渡航。校舎第1棟の完成、新入生迎え入れ。生徒を対象としたWSの展開。9月に小学校開校するも当初の生徒数は3名。

2010年

[3月] 第3回渡航。国立教員大学院（以下 ISP）や現地の高等教育省などを訪問。プロジェクトの現地での認知・浸透。
[8月] 第4回渡航。ISPにて本プ ロジェクトメンバーによる日本語授業導入。校舎第2棟の完成。

2011年

[8月] 第5回渡航。本プロジェクトメンバー及び ISPの日本語習得者の合同サマーキャンプ実施。寝食をともにすることで異言語・異文化交流の深化を図る。校舎第 3棟の完成。

2012年

[3月] 第6回渡航。ISP での日本語授業導入への取り組みとして日本語教授法「
MISJ」の発案者、岩崎美紀子氏らとともに現地フィールドワークを行う。
[8月] 第7回渡航。日本国外務省の草の根無償援助資金に採択され、ISP敷地内でコンゴ・日本文化交流センター(CCJ)の建設開始。株式会社馬印様と株式会社青井黒板製作所様の協賛のもと、ミニ黒板を導入し、学用品を子ども達が自分の手で作る取り組みとしてチョーク作りWSを開始。
[10月～1月] 第1回日本語教員育成研修。第1期生として3名のISP学生を迎え入れる。本研究会日本語プロジェクトが使用している、岩崎美紀子氏の日本語教授法・MISJ を通じた日本語学習と日本文化の体験実施。

2013年 <日本文化センター開設>

[3月] 日本語と日本文化を学ぶために道場と教室に加えて資料室やオフィスを設備。
[6月] TICAD V 第5回アフリカ開発会議のサイドイベントでのブース出展。
[8月] 第8回渡航。ACADEXの生徒数は200名を超える女性やストリートチルドレンの自律支援を行うNGO・APROFED(アプロフェッド)訪問・WS 実施。
[10月～1月] 第2回日本語教員育成研修。第2期生として3名のISP学生を受け入れる。

2014年

[4月] 郁文館夢学園グローバル高等学校との協働ゼミ開始。
[6月～8月] 第3回日本語教員育成研修。2名のISP学生を迎え、本研究会ロ永良部島プロジェクトのフィールドである鹿児島県屋久島町でのホームステイ体験。
[8月] 第9回渡航。エボラ出血熱の流行の影響で渡航期間が短縮される。女性の服飾業が盛んなことから将来的なカリキュラム化を視野に入れ、ブラザー販売株式会社様とクロバー株式会社様の協賛のもと裁縫とミシンのWSを開始。食育を意識し、教育・建築・医療の3チーム協働 WS としてパンかまどを製作・設置。

2015年 <Acadex中学校の開校>

［8月］ 引き続き裁縫WSを行うとともにチョークWSを開始。新たに農業の授業、給食導入に向けたそばの栽培WS、日本の小学生との交流を図る異文化交流WSを開始。国立職業訓練学校（INPP）の見学。株式会社馬印様にご協賛頂いた製並機を使用して、近隣の学校へチョークの販売を行い、そこで得た収益を子どもたちの奨学金や学校の運営費に還元。ISPの学生が発案したシンポジウムでは「教育・女性の社会進出・若者の自主性」の3つのトピックについて議論を交わした。

2016年

[8月] 「プラットフォームづくり」を目標として掲げ、Acadex 小学校、 ISP、 APROFEDの3フィールドに分かれての活動。Acadex 小学校では昨年に引き続き異文化交流WS、ミシンを使った裁縫WS、チョーク生産・販売営業を行う。 ISP では現地学生とともに上総掘りの手法を用いての井戸掘りを行った。 APROFED では地域の若者（キンシャサ大学の学生など）や母親達との交流会を 通じて「女子教育」「職業支援」という観点から知見を深めた。新たにプロテス タント系大学院の UPC と関係を持ち、ソーシャルトランスフォーメーションを 題材に大学院生とともにシンポジウムを行なった。

2017年

[8月] 第13回渡航。Complexe Congo Japon を起点に、多様な分野 でコンゴと日本の協働型トランスフォーメーションのモデルケースを構築することを目的とした「 Summer Camp」ならびに「Lecture Series」を実施。初めて日本語既習者ではないコンゴ人を対象にMISJを用いて日本語指導を行った。また、慶應義塾大学SFCの教員による遠隔講義、柔道などの日本の文化を共有するなど、異文化交流を行った。Lecture Seriesに参加したNGO CONSOLの依頼を受け、初めての試みとなる日本研修を実施。「最先端ではなく最適を」をテーマに、コンゴでも応用可能な技
術・制度の習得のために様々な企業・団体を視察した。

2018年

2018年春渡航では、初めてのビジネスコンテストならびにスピーチコンテストを開催した。ビジネスコンテストでは、日本からOBOGの方々にメンターとして参加していただき、コンゴからの参加者に対してフィードバックをしていただく試みを行なった。また、大使館の協力のもとスピーチコンテストでは、多くの参加者が参加してくださっただけでなく、ACADEXの学生による「虹」をはじめとした日本語の歌の発表など、様々な側面において本プロジェクトの10年以上に渡る活動の成果を感じるものになった。
さらに、特別招聘教授としてISPからSFCへカバタ先生がいらっしゃったり、エトムとダビットが馬印社への研修もかねて来日したり、官僚養成学校の学長御一家も来日するなど、コンゴと日本のさらなるコラボレーションを形にする一年となった。

2019年

春学期は3月の渡航でのフィールドワークやワークショップを通してComplexe Congo JaponやAcadex小学校そしてAPROFEDとの関係性をより深く構築。夏にはエボラ出血熱の影響で集団での渡航は断念、しかし個人で渡航していた福田の協力の下、日本にてコンゴプロジェクト以外のSFC生や他大学生に向けてアフリカへの固定概念の変化を目的としたイベントAfrican NightをSBCにて開催。そして若者がビジネスに関心を持ち挑戦するための土壌を整えることを目的とし、ビジネスコンテストOpen Business Forum(以下OBF)を開催。そして第7回アフリカ開発会議 (以下Ticad7)にてブースの出展とトークセッションを実施。その際にComplexe Congo Japonのマネージャーでありかつての日本語授業の生徒であったWetuさんとMususaさんが来日、NGO CONSOLのAliさんも同様にTicad7に向け来日。秋学期は次回3月の春渡航への準備として第二回OBF開催とCCJを拠点にしたソー
シャルなプラットフォームの醸成・継続と日本研修の安定化を企画。また”国づくり”を見据えて、ビジネス路線のOBFの他に行政路線であるOpen Government Forumを企画。春休みは次回の渡航に向け、各個人が興味分野を各フィールドで展開させる ”One person, One field” をテーマに各個人での活動を深掘り、福

田により繋がりを得た日本食レストランGOENとのコラボレーション企画で日本食の説明と絵を散りばめたランチョンマットを制作。

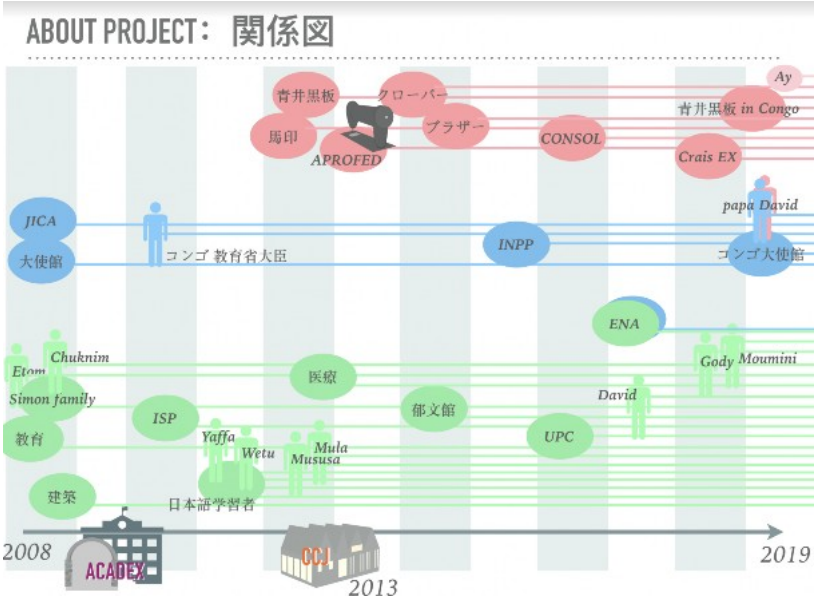
2020年

春学期は、突然の新型コロナウイルス流行に伴い、渡航ができない中で今できることを考え、勉強会に注力した。具体的には、JICAの広報誌や著書「How Europe Underdeveloped Africa」などの文献や、コンゴP卒業生の秋保瑞樹さん・太田泰葉、ルワンダで起業されている山田美緒さんらのゲストスピーカーを通じてコンゴ民に対する理解を深めた。秋学期にはそれらを基に、コンゴサイドとのコラボレーションをオンライン/オフラインで行ってきた。日本に住むコンゴ人の方との鎌倉ハウスでのキックオフミーティングや、KATIKAさんの日本研修を踏まえた渡辺商店への フィールドワーク、CCJとのオンライン日本語交流などを行った。

2021年

2020年に続き、新型コロナウイルスの感染拡大で渡航ができない中、オンラインでの活動を行った。コンゴ民でインターネット環境が整備されたことからオンライン上で顔を合わせた交流ができるようになった。春学期にはオンラインでCCJとJapan

Club、 Cultural Exchange day、 Entrepreneurship and Business Programなどを通してコラボレーションを行ってきた。またオフラインでもKATIKAさんの日本研修を踏まえた渡辺商店へのフィールドワークを続け、OGである高林さんの卒業プロジェクトの展示会運営に携わり、日本国内で様々なコンゴ人/アフリカ関係者と交流することができた。秋学期にはJapan ClubとEntrepreneurship and Business Programを継続して行い、日本とアフリカのグローバルコネクションという授業やJICA横浜x長谷部葉子研究会の共催イベントを通してコンゴ人と両国のコラボレーションについてのディスカッションを行った。



b. 学校づくり

コンゴプロジェクトは2008年に、コンゴ民主共和国ACADEX小学校プロジェクトとして発足した。コンゴ(民) 出身で本塾非常勤英語科講師のサイモン・ベデロ氏の「教育を通じて母国に恩返しがしたい」という強い思いから、コンゴ民主共和国郊外のキンボンドに小学校を建設するプロジェクトとして始動した。このサイモン氏の行動の裏には、「アフリカでは支援してもらうことが当たり前になっている。でも、本当に大切なのは"支援を待つ"ことではなく"主体性を持ち"、自分の力でチャンスを掴み、前に進んでいくこと。ACADEXの教育を通じて未来のパイオニアとして"自分で問題を解決できる力"を子どもたちに蓄えて欲しい。」という思いがある。これはプロジェクト理念の"Do Not Give the People Fish, But Teach Them How to Fish"(飢えているも のに魚を与えず、魚の釣り方を教えよ)にも現れている。小学校建設には私たち教育チームの他、本塾から建築チームと医療チームが携 わった。

私たち教育チームの Acadex 小学校での主な活動としては、教育カリキュラムへの関与の一貫として毎年夏に行われる学生によるワークショップが挙げられる。具体的な例を以下3つ挙げる。

<u>（1）裁縫ワークショップ</u>

コンゴ(民)では、若者の失業率の高さが問題となっており、学校で手に職を付けるこ とができる環境にニーズがある。また現地では女性の服職業が盛んであり、女性の仕 事の一つとして 、裁縫は重要な役割を担っている。 本プロジェクトはブラザー販売 株式会社様からの 20 台のミシン、クローバー株式会社様から裁縫道具の協賛をいただ き、2014 年、2015 年、 2016 年と継続して段階的にミシンを用いた WS を行った。 手縫いの基礎を学び、ミシンを用いて日本の布を用いた巾着袋や、トートバックなど を作成した。活動前は女子生徒の参加が多いと予想されたが、男子生徒も多く参加し、 裁縫に興味を示す生徒が男女問わずいた。また日本の子どもたちと比較して、身近で ある服飾文化の影響から家庭で一度は経験している生徒が多か ったため、裁縫の技術 能力が高い傾向にある。また生徒が縫い方を習得した後、作品に自由にアレンジを加 えるといった、創出性を誘発するコンテンツにすることにより生徒の個性あふれる工 夫が見られた。

<u>（2）チョークワークショップ・チョーク営業</u>

本WS は 2012 年度、教育チームの柏原謙太郎 が行った WS を継続するもので、当時の目的は「学用品を自分たちの力で揃えることで、自律を促す」ことであった。株 式会社青井黒板製作所様の協賛のもと、ミニ黒板を導入に伴い、学用品を子ども達が 自分の手で作る取り組みとしてチョーク作り WS を開始。
WS では、チョークの型を使用し、水と石灰を混ぜてチョーク作りを行う。子ども達 から「もう一度やりたい」という声が上がり、積極的な参加が見られ、彼らの達成感 やものづくりの自信につながったと考える。また 2015 年度からはチョーク販売も共 に実施。株式会社馬印様から譲って頂いたチョークマシンで製出したチョークを近隣 の小中学校に訪問販売し、得た利益で学校の備品の購入や奨学金などに利用している。チョークは 1箱 100 本入りを 650FC（コンゴフラン）で販売し、訪問校や販売本数 などをリスト化。チョークは質がいいことで評判であり、現在は当初から活動に積極 的に関わっていた現地のコンゴ人学生が活動を引き継いでいる。

<u>（3）異文化交流 WS</u>

2015 年度から始動したもので、「相手の立場に立って考えることができる人が増え れば、より良い社会になる」という考えが軸になっている。日本とコンゴという子ど もたちが普段関わることのない極端な異文化交流を通して「国が違えば人は異なるの か」を熟考する機会を。また社会にでた際に自分と異文化な人を理解できる人材が求 められることから、WS を通じて様々な相手の立場に立って考える機会を作りたいと考 え企画。日本の健伸学院健伸幼稚園様に協力を仰ぎ、卒業生の小学生と Acadex 小学 校の小学生を対象に本WSを行う。子どもたちが実際に行き来することは難しいため、 大学生が仲介役となって子どもたちが製作したモノを通じての異文化交流を行う。これまでは旗、ビデオレター、手紙、プロ
フィール帳などを交換。より「お互いの顔が 見えるモノ」を求めて、何よりも子どもたち自身が相手のことを考えた上で、何を作るか、何を伝えたいかを話し合う過程を重要視している。

このように上記の三つ以外にもダンス、社会科見学、かまど作りワークショップ等様々なワークショップが行われて来た。

c. 社会づくり

2008年にコンゴ民主共和国Acadex小学校プロジェクトとして始まって以来、 Acadex小学校の自立運営を目指して活動してきたが、Acadex小学校が現地の人々によって持続的かつ自立的に運営がなされてきていることから、プロジェクトとしてAcadex小学校へのアプローチを取り続けることが難しくなり、2016

年ごろからプロジェクト活動が「学校づくり」から「社会づくり」へと移行した。Acadex小学校プロジェクトが大切にしてきた価値観である「協働」と当時のプロジェクトメン
バーが抱えるそれぞれの「社会に対しての問題意識」を共通点に、プロジェクト設立当時から変わらぬ思いである「コンゴと日本がともにより良い社会をつくること」をプロジェクトのビジョンに掲げ、「日本人とコンゴ人が協働を前提に、繋がっていけるプラットフォームづくり」をミッションに掲げて活動を再出発させた。ここにおける「プラットフォーム」とは、日本人学生と、現地コンゴ人、両者とも個人単位で抱えている何かしらの問題意識、またはその解決策を持ち寄り、社会の問題に対して、共に解決策を探していけるような場・環境のことである。

(1) 日本語授業

2012年に岩崎美紀子氏がコンゴに渡航して以来、MISJ と呼ばれる岩崎美紀子氏が開発した日本語教授法での日本語の授業が開講されてきた。MISJ のレッスンは基本会話形式で行い、日本語を口で覚える形式をとるため、短期間で日本語コミュニ ケーション能力 向上が期待されている。2016年に滞在した秋保は当時のCCJマネージャーとの話し合いの中から、CCCJのVisionを「コンゴと日本をつなぎ、教育の観点から新しい価値を創出すること」、Mission を「日本文化センターを持続可能な組織にすること。」とし、持続可能な組織にするためには、お金を作る仕組みが必要であると考えた。しかし、2016年9月以前、CCJで行われている日本語の授業は無償で行われており、先生の給料などを支払うためのお金を生み出す仕組みが存在しなかった。授業スケジュールや料金設定を再構築し、マーケティング、リクルーティングをし直すことで、2016年11月にはじめて有料の日本語授業を開講することができた。さらに、日本語授業と同じように今まで無料で行ってきた道場の貸し出しの有料化を実現。その後、2017年4 月に日本文化の日を設けて、一般の人々に日本文化センターや 日本を知るキッカケをつくっ
た。参加費 3000FC を払ってもらい、文化センターが慈善団体ではなく、しっかりとしたビジネスモデルを持っていることを参 加者に理解しもらうことができた。さらに、新規コースの開講にあたり、一回目では不十分であった料金表の作成や生徒の個人情報管理のシステムを再整備した。このようなプロセスを経て、より多くの人に日本語の授業を通しての異言語・異文化理解を促進してきた。さらにはボランティアで行われていた日本語授業をビジネスモデルに変換することで、CCJという組織が持続可能かつ自走できる組織へと成長し、現在のコロナ禍においても日本語授業を継続する組織へと変化を遂げている。

(2) CAMP SERIES

2017 年夏渡航では、「コンゴ民主共和国と日本が多様な分野で協働した活動を行うための基盤作り」を目的としていた。目的を達成するためのプロセスとして互いの文化や価値観、考え方の理解、アイディア出しの習慣作り、問題発見・問題解決への道だてを設定し 7 日 間のSUMMER CAMPを実施した。主なプログラムは「MISJ 講座」「シンポジウム 講座」「文化交流」の 3 つであった。MISJ講座で は、日本語を短期間で学ぶことができるMISJを用いて、日本語を通した日本文化
を学んでもらうことを目的とした。シンポジウム講座では、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの教授・准教授 や日本文化センターの現地人スタッフに、「コンゴ民主共和国と日本の人々が協働する上 で知っておくべき価値観や知識、考え方」というテーマで、受講者に対して講義を行って いただいた。上記のような講義を行っていただいたのは、コンゴ民主共和国と日本が共 に 社会問題解 決を切り口に、社会に対して貢献していく際に必要になる際に必要になる知識や考え方を学ぶことで、受講者が社会作りを主体的に考えられるようになることを目的 としていためである。この目的を達成するために、以下のような活動ビジョンを掲げた。 コンゴ民主共和国と日本が共に社会問題を解決していくには、互いのバックグラウンドや価値観を共有し、その上で、問題を発見して解決していく方法を考える。そして最終的には 問題を解決するためのプロジェクトを構想してもらうことで、受講者が社会問題やその解 決方法に対して主体的に考えることを目指した。文化交流では、言語以外のコミュニケーションや日本の価値観や文化を学ぶことができるプログラムを設定した。ダンスやサッカー、歌を通して「参加者が体を動かすことで、 お互いを知る」、そして武道や習字を通して「日本の価値観や文化に触れ、これから日本の NGO/企業と関わっていく中で日本社会で大切にされている文化を学
ぶ」。これらのプログラムは、コンゴ民主共和国と日本の人たちが社会作りを行う際に、 信頼関係や協力関係を築くことを目的に行われた。

(3) スピーチコンテスト

2018年春渡航では、コンゴにおける日本語の普及と日本語レベルの高さを対外的に示すことを目的に、日本大使館から協賛金をいただいてスピーチコンテストが実施された。日本語勉強歴6ヶ月以上、日本語勉強歴6ヶ月以内、日本語勉強歴3ヶ月以上の3つのレベルごとに対象者を分けて、自分自身と日本という内容で日本語でのスピーチをしてもらい、このスピーチコンテストの開催を機に、日本語検定を受けることができるようになった。さらに、言いたいことをまとめてスピーチとして発表してくれるため、同年代の参加者が考えていることの軸がとてもよくわかるという収穫をえた。

(4) レクチャーシリーズ

2017年3月に始動し、8月に行われた第13回目の渡航からレクチャーシリーズが CCJ(通称:Congo Complex Japon/日本文化センター)で開始された。内容としては文化センターの発展と持続的運営」と「日本人とコンゴ人が協働を前提に、 繋がっていけるプラットフォームづくり」を目指し、在コンゴ民 JICA 事務所と日本大使館、 NGO YALI などを巻き込み企画・運営を行った講義シリーズである。

「Lecture Series at Complexe Congo Japon」 のレポートより:企画目的 :

1:コンゴ民在留邦人により定期的に、国立教員大学(ISP)にある日本文化セン ターで日本の専門性やコンゴでの日本の取り組みなどを紹介することで、日本のプレゼンツ及び日本文化センターのプレゼンツをアピールしていていく。

2:Lecture Series の参加者から、1 回10$の参加費を徴収し、その収益は日本文化センターでの日本語の授業運営費や日本文化発信などに利用し、日本文化センターの持続的且つ活発的な活動を目指していく。開設 5 周年を迎えた、日本文化センターの機能とメッセージ性をより明確にし、安定した運営体制の確立をめざして、2 年間で月例 Lecuture Series を軌道にのせ、コ ンゴ民に於いて日本の誇りとなる拠点に成長させていきたい。

3:コンゴ人と日本人がお互いに、社会に存在する課題に対して問題意識を持ち寄り、一緒に解 決策を探していけるような「日本人とコンゴ人が協働を前提に、繋がっていけるプラットフォ ーム」となることである。

(5) CONSOLの日本研修

計4回にわたって行われたレクチャーシリーズに全4回参加していた、CONSOLというキンシャサ市内を中心に「農業」と「ゴミ管理」に対してアプローチ している NGOのメンバーである。Barcat Ali 氏と Eric Casinga 氏から、4 回目終了時に直接のコンタ クトがあった。彼らのオフィスと農場の視察とそこでのそばの試栽培など、1:1のより密接な関係性構築ののち中で、NGO・CONSOL代表の Barcat Ali氏が「日本で、自分たちの活動分野の研修を受けたい。」という要望に応える形となり、日本での研修が企画された。
CONSOLとは2017年2月に設立されたアフリカのコンゴ民主共和国首都キンシャサで活動している環境系NGO団体である。活動は『コンゴ民主共和国の持続的な発展に寄与すること』という目的で展開されており、
①適切な教育・健康・食糧・栄養・環境にアクセスできない人々への支援
②地域の人々に対して自然資源の持続的な利用についての情報共有・啓蒙活動の二つが中心になっている。主な取り組みとしては、
①ペットボトルリサイクル:キンシャサでは街中にペットボトルなどのゴミが溢れている。そのペットボトルを集めて、燃料に変える活動を行っている。
②アグリビジネス:キンシャサ市内にある53ヘクタールの土地で、様々な農作物を育てている。現在では卒業生となったプロジェクトメンバーの秋保瑞樹が紹介したそばを植えている。
そこでCONSOLのメンバーを日本に迎え、日本研修が2017年に行われた。滞在は『日本のリサイクル技術や制度を学ぶこと。農業としてのあり方や農業技術、コンゴ民で必要とされるような作物の調査などを行うこと。そして、日本とのコネク ションをつくり、今後も継続的な情報交換や協力関係を築くこと』という目的のも と、およそ1ヶ月に渡り日本での研修が行われた。具体的な活動内容としては、

1. 郁文館夢グローバル高校見学での書道をはじめとした実際に日本の伝統芸能に触れることで、日本人が大切にしてきたことや精神を実感値を持って体験、そしてそれらが実際に日本の教育カリキュラムにどう言った形で導入されているのかについて、授業を現場感覚で見ることで、これからの日本を支えていく子どもたちの現状の把握と共に体感することができた。
2. ワタミファームアンドエナジーさまをはじめとする、本研修でお力をお借りしたワタミグループへのプログラムのご挨拶とNGO・CONSOLの事業内容についてのプレゼンテーシン:大きな成果としては、渡邉美樹さんとface to faceの関係性を構築できたことと、WATAMI Farmの研修を受ける中でのご挨拶ができた点である。NGO・CONSOLの2人にとって、会社を1から立ち上げここまで大きくしてこられた渡邉美樹さんのお話しを聞くことは彼らにとってこの上ない刺激となっただろう。
3. 更科堀井様とのそば体験:そばの栽培を行っているNGO・CONSOLに、日本のそばは現在どのように食べられているかを実際に見て、感じてもらうために本場の蕎麦を試食(せいろ蕎麦ともり蕎麦)。後日行われたそば打ち体験では、そばの性質を理解し、そばをコンゴ民で応用する際のヒントを獲得。また、現地で作ることを第一にイメージしそば粉パンの試作も行われた。
4. 宮本製粉株式会社様の会社訪問:製粉工場見学では、そばの実からどのような工程を経てそば粉になるのかについての詳しい説明やつ1つの機械や工程の仕組みであったり、プロセスなど農家での実際のそばの栽培の仕方や収穫方法などより現場目線で詳しい解説を受けることができた。
5. 宮崎県の西澤養蜂場様での蜂蜜研修:養蜂場を案内して頂き実際にどのように蜂を飼育しているのかを説明を受けたのち、店舗・オフィス見学からパッキング工場まで視察させて頂き蜂蜜を採取してから、商品にするまでの一連の流れを学んだ。実際に蜂を管理している様子や、養蜂がものように行われていて、どのタイミングにどのような地域で、どのような果実から蜜が取れるのか、また具体的にはどのような基準があるのかなど詳しく聞くことができたのは大きな収穫である。
6. 戸部商事様とのペットボトル研修:実際にペットボトルリサイクル工場への訪問を始め、日本のリサイクル事業をマクロの視点とミクロの視点両面で学ぶことができた。リサイクルやゴミマネジメントにおいて政府と民間の関係性やゴミに関しての法律など、コンゴ民主共和国では政府が機能しておらず、ゴミに関しての法律や制度が確立されていないために発生している問題をゴミに関する日本の歴史と絡めながら学びを深めた。
7. 人参出荷工場見学・農場にて人参収穫体験・落花生卸工場見学と言った農場研修:実際に収穫から出荷までの工程を見てもらうようにプログラムを用意していただき、ワタミ

ファームが提携している人参出荷工場に訪問し、検品作業や仕分け作業、製品の保存や集荷するための箱詰めなどの工程を見学が行われた。そこでの見学を終えた後、ワタミファームの農場に戻り人参の収穫作業の体験では、機械を使い、人参を掘り出し、その後人参の葉の部分を切り外すというところまでのプロセスに関わった。また、同時に提携している落花生卸工場も伺い、生産、加工、出荷、配送、販売といった一連の流れを実際に見ることができた。

8. 相模原センター様・日本フードエコロジーセンター様・和民JR横浜駅前店様による環境研修：1.相模原センター：商品仕分けや工場のオペレーションの仕組みなどについて学ぶ
   2. 日本フードエコロジーセンター：食品廃棄物の飼料化を学ぶ
   3. 和民JR横浜駅店：1で仕込まれた食材を実際に店舗でいただく。リユース瓶の仕組みも学ぶ。
9. 株式会社ガイアドリーム様による環境研修：世界で唯一、100%リサイクルのペットボトルを生産する技術を持っている東京ペットボトルリサイクル株式会社様を訪問。どの組織が
どのように回収しているのか、回収されたペットボトルがペレットやフレークになるまでの一連の流れを視察。

(6) Open Business Forum

2017年に開始したレクチャーシリーズでは、コンゴ民主共和国におけるアントレプレナーシップの育成とそのコミュニティの醸成を図ることを目的として活動を進めてきた。実際に、過去には環境系NGO CONSOLが日本にて一ヶ月の日本研修の実現、そしてそれは専門性と具体的な目的と共に「最先端ではないけれど最適な研修先」を数多く訪問することで、帰国後にそのままの施設を活用して農作物の栽培効率を向上させることに繋がった。NGO CONSOLはTICAD7への参加もあり、コンゴ民でも積極的に若者へのエンパワーメントを継続的に行われている。そうした背景を踏まえて開催されたOpen Business Forumとは、2019年に行われたイベントであり、ビジネスに関する知見にアクセスする機会が少なく、特にトップダウンの文化が強く根付いているコンゴ民において、若者がビジネスに関心を持ち挑戦するための土壌を整えることを目的とした。今回の3日間に渡るプログラムでは、コンゴプロジェクト設立当初から大切にしている価値観である、「今ここから出来る方法を考える~Social Transformation~」を念頭におき、日本文化と精神性の共有を通じて以下の三つのことを目標として掲げた。

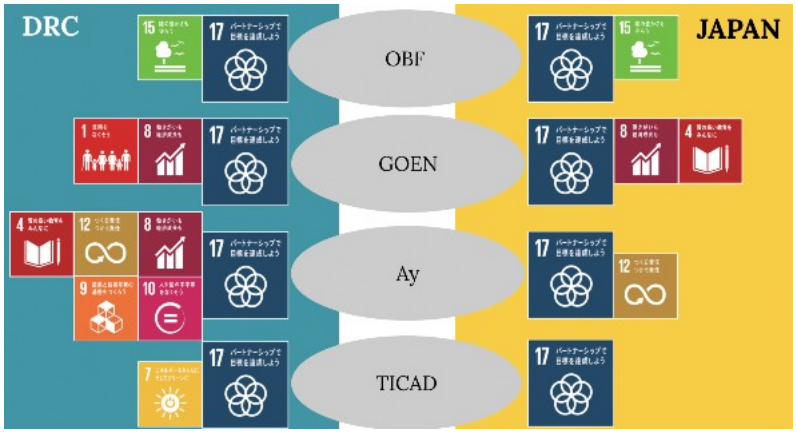
①**0**から**1**、そして**1**から**10**に発展させていくためのマインドセットを共有すること
②ビジネスを行うための基礎的なフレームを習得すること
③**Platform Congo Japan**を拠点としてレクチャーシリーズに続きこの様なプログラムを開催することで、コンゴ民国内でのビジネスに関心のある若者コミュニティの醸成

会場はキンシャサ市 ISP/Gombe校内 NGO日本文化センター（COMPLEXE CONGO JAPON）で行われ、9月16日18日21日の合計3日間の日程で行われた。。9/21に最終発表を行う予定であり、それに向けて9/16はビジネスやプロジェクトのブラッシュアップを目的としたディスカッションの場を設け、その中でコンゴ民と日本の協働を見据える上でのマインドセットの醸成を目指す。9/18はアフリカ諸国での実務経験のある日本人起業家ゲストスピーカーによるレクチャーと再度ブラッシュアップを行い、日本との協働を見据えたビジネスにおける財務的アクションを考える。最終発表では「日本での研修で何を求めるか」をより意識した、現実味を帯びた発表が求められた。優勝者であるKATIKAさんには日本企業への研修が寄与されることとなった。

(7) 個人活動の展開

-Ay

2019年3月の渡航の際、約3週間で40着の洋服を製作した村上采さんは女性やストリートチルドレンの支援活動を主としているNGOのAPROFEDでの4日間の滞在での関係性構築を経て、帰国後の5月（令和初日）にアパレルブランドAyを本格的に始動させた。NGO APROFEDとは元々女性支援の活動として、コンゴの伝 統的な布であるリプタを使用した民族衣装・バッグなどの製作を行い、女性が職 に就き自らの手でお金を生み出す機会を提供している。プロジェクトとは2013年から関わりを持ち始め、2015年には子ども支援活動としてMelodia小学校を設立し、ストリートチルドレンや孤児院で暮らす子ども達に教育の機会を与えるための活動を行っている。2017年9月には、新宿マルイ本店でリプタ販売のイベント「コンゴ週間in新宿マルイ本館by慶應SFC長谷部葉子研究会」を開催し、APROFEDで働く女性達によって作られたリプタの服やバッグを販売した。2018年7月には慶 應義塾大学湘南藤沢キャンパスで開催された七夕祭でも販売した。そうしたNGO APROFEDとコンゴプロジェクトメンバーである村上采さんのコラボレーションにより、鮮やかな柄と色が特徴的なコンゴ民主共和国の伝統生地であるリプタを、コンゴ民を支える家庭のマザーたちが一つ一つ手作りしているという実に「愛」に溢れたブランドが設立された。



-GOEN

また、現地初の日本食レストラン「GOEN」の立ち上げも個人活動の展開において大きなターニングポイントである。2017年夏にコンゴ民主共和国プロジェクトと日本文化センターが共同開催したSUMMER CAMPで、コンゴと日本の協働型ビジネスモデルとして日本食レストランを提案したEMILEとコンゴプロジェクト卒業生である福田啓介さんが中心となり、設立に至った。在コンゴ民主共和国日本大使館で働かれている方の奥様の一人が日本調理講師として、そして熱い思いを持った多くのコンゴ人メンバーとともに多様なメニューを値段もローカルなものと差をつけずに販売。メニューの内容も基本的に現地で材料を仕入れることが可能な料理を提供している。このレストランの設立は、コンゴ民主共和国の現地若者の社会コ ミュニティへの貢献を強く望む一方で、経済的自立を担保しての自己実現の機会が少ないことへの問題意識や、現地在留邦人と現地の若者が直接関わり互いを尊重し合うこと、そしてコンゴ民主共和国と在留邦人が一市民として交流できる場の提供を行う上での大事なプラットフォームとなっている。

(8)withコロナ

2019年末から中国を中心に猛威を振るった新型コロナウイルス。世界で1654万人以上の感染が確認され死者も65万人を超えた。2020年になった春、日本にま で影響を及ぼし、不要不急の外出は基本厳禁とされ三密を控えるように導入されたオンライン授業・リモートワークに影響され4月、慶應義塾大学環境情報学部・総合政策学部では全面的なオンラインでの授業が決まり研究会やプロジェクト活動もオンラインに限定された。

それは渡航ができないという事実も示し、オンラインでどこまでできるのか・今ここで何ができるのかを最大限に考え抜き、インプットに力を入れることに徹底した。コンゴP卒業生の秋保瑞樹さん・太田泰葉、ルワンダで起業されている山田美緒さんらのゲストスピーカーを通じてコンゴ民に対する理解を深めると共に、オンラインならではの場所を問わないことで同時に様々な人と繋がり、コンゴサイドとでさえも他の人々と同じようにオンランでのコミュニケーションで対等性が一気に上がり、オンラインになったからこそ人と人との人間関係や関係性構築を大切にした。

新型コロナウイルスの影響は大きかったものの、コンゴサイドとのコミュニケーションは通常通りで定期的な連絡やオンラインミーティングで相手の状況や国の状態を把握した。

しかしコンゴサイドでは、新型コロナウイルスの影響で一気に大勢の人間が自宅や外出先からインターネットに繋ぎこれまで以上にネット環境が悪化してしまったた め、オンラインでのミーティングや顔合わせにも一苦労だった。

中々コミュニケーションが上手く取れず意見をシェアし合えない関係が続き、日本 サイドからとりあえず企画をしようとしても”協働”を意識して、一方的な意見や企画は好ましくないのではないかという考えが足かせになってしまい春学期は企画やイベントなどはできず、お互いの状況を聞くことで精一杯だった。秋学期になり、「”協働”とはなんだろう」という疑問を栗本の些細な疑問からプロイジェクトで改めて考え直し、全てを0から一緒に作り上げることが”協働”なわけではなく、コンゴと日本常にどちらかがリーダーシップを取り企画を持ちかけたりアイデアを出したりして、そこ から一緒にブラッシュアップする過程も”協働”なのではないか？という新たな”協働”の定義をプロジェクト内で再定義した。

d. OBF

2019年にコンゴで開催されたビジネスコンテストopen business forum(以下OBF)の優勝者であるKatikaさんの日本での日本研修がコロナの影響で開催できなくなってしまい、研修をオンラインへと変更する案を検討したが話し合いの末に、定期的な
ミーティングを行なう流れになった。そこで私たち日本サイドでは、日本から届けられる情報を定期的なミーテイングを通しなるべく多く発信することを意識し活動することにした。

Katikaさんは養鶏場を営み一年間様々な種を生産しており、その中でもピーナッツ生産に力を入れているKatikaさんの事業をより理解すること、加えてコンゴでも比較的に応用可能な知見を習得することを目的とし、神奈川県中郡二宮町に位置する日本でもっとも古いとされる落花生屋「渡辺商店」を見学。
明治初期創業で現在4代目の渡辺商店では、農家の方とのコミュニケーションから加工・販売までを一貫して行なっている。見学を通して「自分でつくった機械なら自分で直せる」「高くても美味しいからこの工法と素材にこだわっている」など、長年培われてきた様々なノウハウや精神性を随所に垣間見ることができた。また、見学の後での座談会ではコンゴの状況やプロジェクト活動に対して関心を持って頂けると同時に、「いつでも協力する」と仰って頂けたことも大きな収穫だった。その見学レポートはまとめて、KATIKAさんに共有し、その上でのミーティングも行った。コンゴのKatikaさんの現場を見たり直接把握したりできない中で少しKatikaさんに寄り添えた実感がした。
現在はピーナッツ に関するパッケージングについての情報をKatikaさんが気に なっており、中国などで安くパッキングしてくれる企業を検討されていたので、その情報に加え自らパッケージングをするラミネートの提案などもし、少しでも自分の手でリーズナブルに発注できる方法を今も尚検討している。

4. 現在の活動

a. 渡航できない中でのコラボレーション

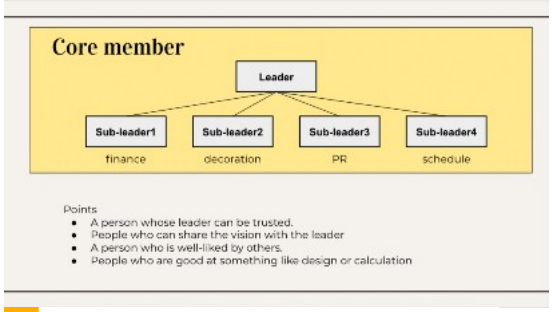
2021年度も新型コロナウイルスの流行により、引き続きコンゴ民に渡航できない状態が続き、コンゴ人も日本に渡航することが困難であるという状態が続いた。そのため、オンラインでの活動を主軸にして日本とコンゴでコラボレーションを
行ってきた。従来通りのように衣食住を共にした五感の共有をするということは難しいが、オンラインでコラボレーションすることを諦めずに活動を続けてきた。現地渡航ができていた時代は、コンゴに滞在する日本人が必ず一人いて、そこと連携しながらオンラインで日本とコンゴがコラボレーションを行っていたのだが、渡航にいけなくなってから、現地に日本人がいなくとも、コンゴサイドが主導になって日本とコンゴでイベントを実施、運営できるようになったことは進展したことの一つである。

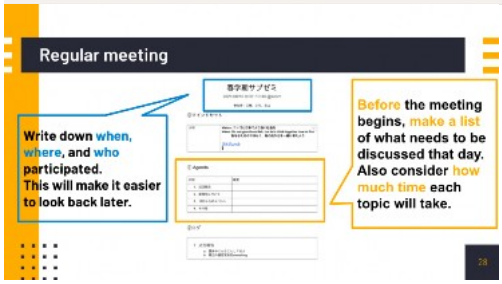
現在の活動オンライン Japan Club

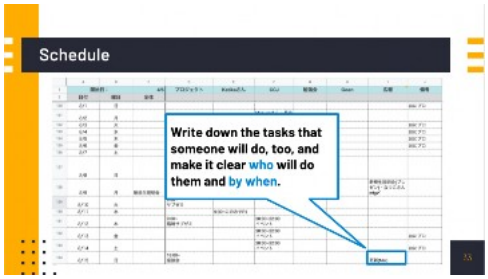
両国のコラボレーションを見据えて毎週土曜日19:00～20:30に、CCJで日本語を
学ぶコンゴ人とオンラインで日本語の練習、文化交流を行った。プレゼンテーションのテーマは温泉、盆踊り、民話、民謡、日本人大学生の一週間スケジュール、日本の交通事情、ラクロスなどであった。テーマはコンゴ人の関心にあるものに沿った形で行い、12月実施の日本語能力試験（JLPT）5級受験に向けた日本語の練習を行った。現地で日本語を教えているCCJマネージャーのMususaさん、 日本語教師のJeandieさんの授業に加え、このJapan Clubの活動を通して、12月に受けたJLPT5級に約20人ほどの日本語勉強者であるコンゴ人が合格した。春学期にはブレイクアウトルームを活用し、プロジェクトメンバーとJapan Clubに参加するコンゴ人で一対一のコミュニケーションをとることができた。

Entrepreneurship and Business Event
2017年ごろからアントレプレナーの育成に力をいれて、日本サイドが主導でレク

チャーシリーズ、日本研修やオープンビジネスフォーラムを開催してきた。起業家育成の活動がパスダウンされ今回、コンゴサイドが主導となり、オンラインで起業家を目指すヤングアントレプレナーや日本とコラボレーションをすることに興味を抱いているコンゴ人に向けたセッションを開催した。春学期には長谷部葉子研究会の上席研究員であり、起業家でもある、松田龍太郎さん、長谷部葉子准教授にご講演いただいた。秋学期にはプロジェクトメンバーが日本人がビジネスをす る際に大事にされる精神性、国民性であったり、イベントの企画・運営に関して自分らの経験知を発信した。CCJのマネージャーであり、このプログラムの企画者であるMususaさんは「とてもためになる内容のプレゼンでした。他のコンゴ人たちにもまたこのプレゼンを聞かせたいです。またよろしくお願いします。」と言っていただき、セッションとして意義のあるものができた。しかし、このプログラムを通し て両国で、自分の将来を考え、国を変えたいと思う若いアントレプレナーが育つことを目的としていたものの、日本サイドにあまりアントレプレナーシップが育まれなかったので、その点に関しては今後さらに工夫していきたい。







Online Cultural Exchange Day
5月29日(土)18:00~22:00に日本文化センターで日本文化に興味を持つコンゴ人とオンラインで行った。セッションでは、箸の使い方、日本語の自己紹介、浴衣の着方の三つのトピックに分かれ、WSを行った。
60人を超える参加者が集まり、研究会内で他プロジェクトのメンバーやコンゴプロジェクトOGのサポートを受けて、日本文化の発信を行った。このセッションでは、参加者から10ドルの参加費を集めていて、これらはCCJの活動費用に回っている。

JICA横浜 x 長谷部研の共催オンラインイベント

2022年1月13日18:30～20:00にオンラインで開催され、日本とコンゴのコラボレーションの可能性について考えることやJICAの国際協力を広めるという目的で
オンラインで開催された。長谷部葉子研究会の所属学生をはじめ、国際協力やアフリカに興味のある人々がイベントに参加し、コンゴプロジェクトの活動を発信する機会となった。またCCJマネージャーのMususaさん、ISP出身の起業家である Etomさん、JICA、株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティングの西山さん、株式会社AyのCEOかつコンゴPOGである村上と共催し、日本とコンゴ民主共和国の協力のあり方、そしてコロナ禍におけるコラボレーションの可能性について議 論がなされた。この共催イベントは、これまでのOBOG達が長年積み上げてきたものが実を結んでできた成果であり、14年の歴史という土台の上で、日本の様々なセクターを巻きこむことを今後も行っていきたい。

オフライン

高林さんの卒業プロジェクト展示会

コンゴPのOGである高林さんの卒業プロジェクトを起点とする、OG高林さんと Kileleさん、在日コンゴ民主共和国大使館主催のイベントであり、6/18-6/21に原宿のUltraSuperNewGalleryで行われた。
絵本の広報イベントであり、高林さんの絵のファンを作ることが目的でした。その下に、アートや文化を通じてコンゴと日本のコラボレーションが活性化してほしい、多くの人々にコンゴという国を知ってほしいという優美子さんの想いが込められていた。この展示会は、コンゴ大使館のサポートがあって成り立ったものであり、渡航にいけない中で官学が連携した一つの事例である。

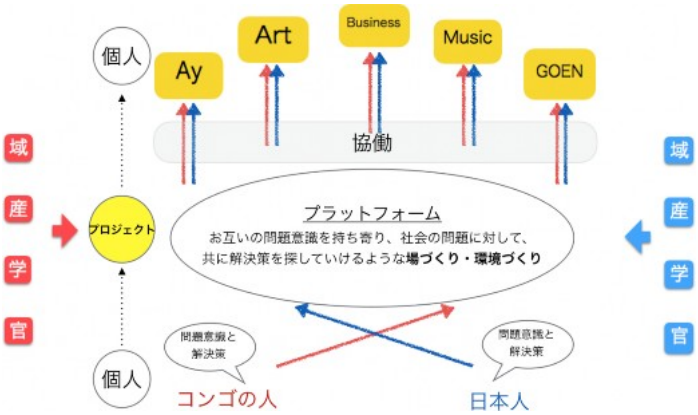
5. 今後の展望

以下、コンゴプロジェクトが今後どのように国づくりへと発展させていくか、私たちが見据えていることを述べる。

【プロジェクトとしての目指すべき姿】

コンゴプロジェクトでは、日本人とコンゴ人が常にお互いの問題意識を持ち寄り、社会の問題に対して共に解決策を探していけるような場づくり・環境づくりを可能にするプラットフォームを目指している。

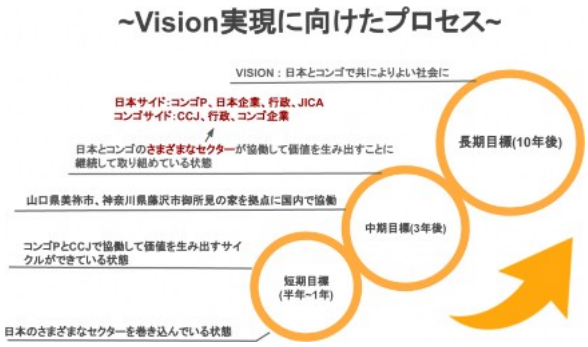
コンゴプロジェクトというプラットフォームを起点として個々がそれぞれの分野で自己実現をし社会にアプローチしていくことで、それぞれがそれぞれの分野からの世界をよりよくしていく積み重ねが、私たちプロジェクトの最終ゴールであるより良い社会」の実現に繋がると考えている。



a. プロジェクトとしてのひとまとまりを見据えたマイルストーン

(1)「日本とコンゴのさまざまなセクターが協働して価値を生み出すことに継続して取り組めている状態」を作る。

Acadex小学校プロジェクトとして始まったコンゴ民主共和国プロジェクトは、今年で14年目に突入した。これまで、日本文化センターCCJを拠点にコンゴの人々と日本の人々が知見を共有し議論、協力していく場づくり・機会づくりとしてのプラットフォームづくりを軸に活動してきた。「コンゴと日本で共によりよい社会に」という長期目標を達成するため、3年後の長谷部研のひとまとまりがつくまでに「日本とコンゴのさまざまなセクターが協働して価値を生み出すことに継続して取り組めている状態」を中期目標として掲げる。この目標の背景としては、プロジェクトとしてひとまとまりが着いた後も、コンゴと日本で協働できる関係性を残していきたいという想いが込められている。また3年後までに山口県美祢市と神奈川県藤沢市御所見付近に長谷部葉子研究会用の家を建設し、そこを拠点に国内にいるアフリカ/コンゴ関係者と日本人の間でコミュニティを創出し、協働することを目指す。これに関してはのちの具体的な活動で詳細を述べていく。中期目標に向けた短期目標として、まずは「コンゴプロジェクトとCCJで協働して価値を生み出すサイクルができている状態」を作り出す必要がある。そこに日本とコンゴの様々なセクターを巻き込み、域産官学が連携することで長期目標を達成したい。



（2）Visionに向けたアクションプラン

-Japan Club

Goenレストランなどをきっかけに日本語を学び始めた若者が、より日本への理解を深めコラボレーションを誘発するコミュニケーションを取る場となることを期待している。CCJで日本語を学び、より日本の文化を経験したいと思う若者が集まる Japan Clubはオンラインでも、コンゴ人が日本語練習を目的に交流の機会をつ くっている。一番気軽に多くのコンゴ人と日本人が交流できる場所として、安定してコミュニケーションをとることができる持続可能なシステムの構築を目指している。

-アントレプレナー育成

ビジネスコンテストの開催。優勝者はオンラインを通して日本研修を行い、渡航が可能であれば来日しての研修を予定している。日本研修ではビジネスに精通した日本のビジネスマンとのパイプ役をコンゴプロジェクトが担いたいと考えている。 そして将来、研修者が日本で学んだことをコンゴに持ち帰り、次の世代のコンゴ人の研修を促進し、コンゴの若者にアントレプレナーシップが育成されていくことを期待している。日本の民間企業などと連携して、ビジネスの第一線でご活躍されている方々をお招きし、ビジネスについて学ぶことのできるコンテンツなどもやって いきたいと考えている。

-日本版文化センターの設立

OBOGの力を借りながら人と人が繋がれる場として日本版文化センターを設立したいと考えている。目的としては、コンゴ人やアフリカ人と日本人が交流できる場の創出、及び対日本人に向けたコンゴプロジェクトの活動の発信だ。日本版文化センター内でコンゴの野菜を育て、コンゴの方が来日された際、そして在日アフリカ人の方と生活を共にする。生活を共にする中で、お互いの文化を知り、様々な学びが生まれていくと考えている。
場所としては山口県美祢市や神奈川県藤沢市御所見を想定している。OGOB、不動産三田会の方を始めとする多くの方に農業の知識増築や、経済的な支援をして頂き、実現していきたい。

-勉強会の開催

CCJ、JICA、企業、行政など日本のさまざまなセクターを巻き込み、How Europe Underdeveloped Africaなどの、文献を使った意見交換を行い、勉強会を開催する。勉強会を通して、将来日本とコンゴの様々なセクターでコラボレーションが生まれるための土台づくりを行う。

6. PJメンバー個々人の想い

a. 三橋の想い
   i. 2019年度秋学期に履修した日本とアフリカのグローバルコネクションで出会ったコンゴ人とコンゴプロジェクトの先輩方に惹かれ2020年度春学期から所属している。すぐにコンゴ民に行けると信じてやまない中での入ゼミから、まさかコロナウイルスがここまで猛威を奮い続けると誰も想像していなかった。渡航経験がある先輩方について行くことに必死な1年間、先輩方からコンゴプロジェクトのスピリッツを吸収し、継続生が一人となり、リーダーとして駆け抜けた2021年度春学 期。文化の違いや時差の影響で、難しいこと、辛いこともありつつも、 2019年から魅了され続けているコンゴという地域、そこに住む人た ち、そこでの文化を持って日本に来ている留学生たちのためにできることは何かということを模索してきた。その中で「日本」を語るには、コンゴ、アフリカと日本が共に「より良い社会」を実現するためには、自分自身が日本を知らなさすぎるということを痛感した。コンゴ渡航ができない中、今暮らしている日本本来の強みを知りたいと思い、休学し、山口県美祢市での滞在を決めた。滞在する中で、人生のほとんどを神奈川で過ごしてきた私には新鮮なことが多く、その気づきが日本が明治以降発展を遂げてきた礎になっていると感じている。夏からは、ロンドン大学東洋アフリカ学院への留学を予定しており、美祢市での滞在とコンゴプロジェクトを繋げ、日本とコンゴがより良い社会の実現について考えたい。そして、コンゴプロジェクトに学びを持ち帰り、より充実したプロジェクト活動に活かしていきたい。

b. 小川の想い
   i. 私は2021年度春学期に晴れてコンゴ民主共和国プロジェクトに所属することなった。当時は新型コロナウイルスが流行してから1年が過ぎた頃で、夏頃にはコンゴ民に渡航できるようになると信じており、コンゴに渡航したいという想いを抱きながら現地に行けない中でも国内にいるアフリカ/コンゴ人関係者に会ったり、オンラインでの活動を進めてきた。現地に行けず、実感を持ってプロジェクト活動をすることが難しいと感じることが多くあった。しかし、そんな中でも今こうしてコンゴプロジェクトに所属して、いつかコラボレーションすることを諦めていないのはコンゴという国、そしてコンゴ人の国民性に魅力を感じているからなのだと思っている。新型コロナウイルスの感染拡大により、社会は変則的で、予測不能な世の中となっていて、今後もいつ現地に渡航できるようになるかが不透明である。ただ、日本国内にも多くのアフリカ/コンゴ関係者はおり、工夫次第でさまざまなコラボレーションをする可能性がある。色々な社会的制約がある中でも、「今あるもので最大限のできることをやる」という考えを忘れず、いつか渡航できることを信じてこれからも日本とコンゴのコラボレーションの可能性を広げていきたい。

c. 佐藤の想い
   i. 2021年度秋学期から、高校生の頃からの憧れだったコンゴプロジェクトに所属した。今学期は新型コロナウイルスの影響により活動に制限がある中でも、4年間の内いつかコンゴに行けると信じ、オンライン下でできる事を模索し続けた。ただオンラインでの活動には制限も多く、異文化と共に協働することの難しさを何度も感じてきた。しかし、その難しさの何倍もコンゴの方とコミュニケーションを取ることが楽しく、深い関係性を築く事ができた事が嬉しかった。毎週オンラインで繋がれるという事を利点と捉え、来期以降はさらに深い関係性を築いていきたい。さらに、映像などを用いた文化交流をJapan Club内で行っていきたいと考えている。